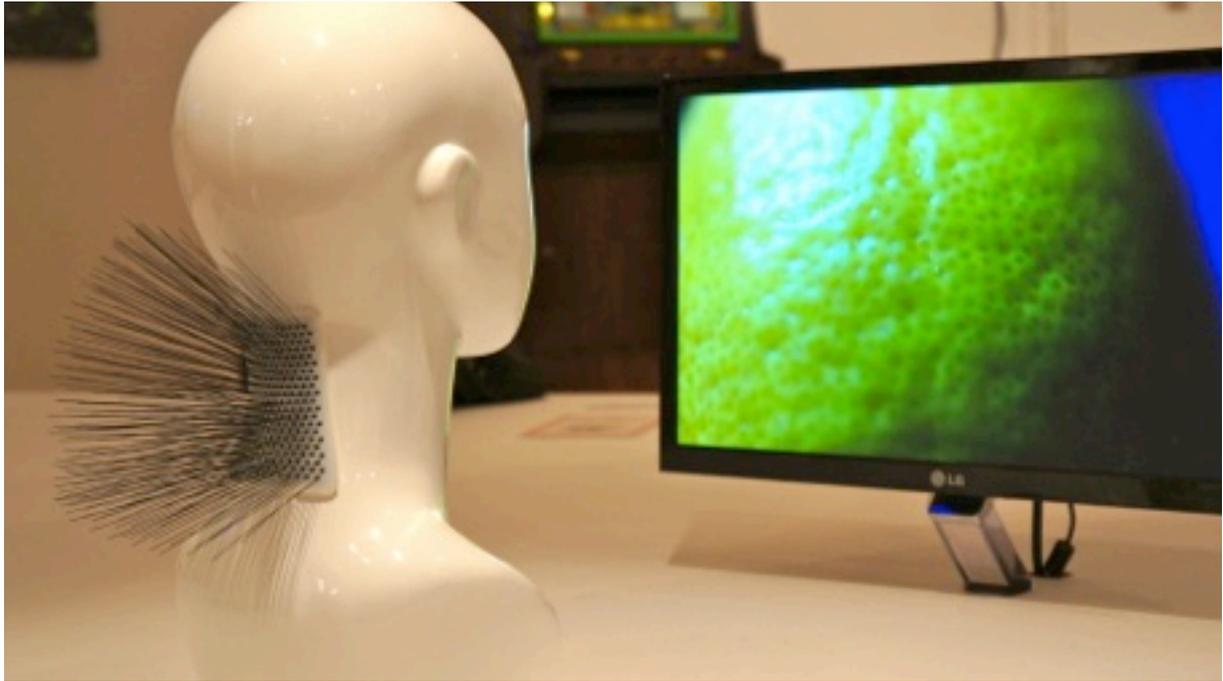


Royal College of Art, Design Interactions (RCA DI) の修士課程に所属している牛込陽介です。テクノロジーが人間や社会に与える影響について、クリティカルデザインという手法を用いた作品制作や研究を行っています。

今回は、前回のレポート以降に制作した作品や、それらに基づく考えなどを紹介したいと思います。



まずは、1月に開かれた作品展示会に出展した「Sixth Sense Propagator」という作品です。この鳥肌デバイスは、肌の下立毛筋の動きとリンクした人工毛を持つ架空の器具で、デバイス同士は、人工毛の共振によって互いに同期して毛を逆立てることができるという設定です。笑うと幸せに感じ、泣くと悲しくなるのと同じように、行動や現象が感情に先立つならば、鳥肌を引き起こすこのデバイスは一体どんな感情を想起させるのか、という問いを発しています。こうした問いによって、第六感のような人間の微妙な感情にまでテクノロジーが侵入してきた時に起こることについて考えるきっかけを与えることが狙いでした。展示では、抽象的な映像をみたデバイス装着者（マネキン）が鳥肌を立てる様子を鑑賞できるようにデザインしました。

チューターとは、展示によって正しく問いの意図が伝わったかというディスカッションをもち、「前提となる仮定が複雑で問いまでたどり着くのが難しいこと」、「鳥肌というモチーフが多くの人にとって、感情とはあまり結びつきのない現象であること」、「鳥肌デバイス同士の共振機能が展示では伝わらないこと」という点を指摘されました。このディスカッションによって、鑑賞者の中に思考や議論を促すときに必要な要素を認識することができ、非常に有意義だったと感じています。



次に、5月に制作した作品を紹介します。「United microKingdon」というタイトルの1ヶ月の課題で、イギリスの州がひとりひとつずつ割り当てられ、その州を「デザイン」というものです。その意図は、より大きな対象を説得力のある思考実験的としてデザインすることで、普段は考えることができないことを考えるきっかけをつくるというものでした。私はCambridgeshireを割り当てられ、ケンブリッジ大学を中心としたテクノロジーや知識主導の文化を極端に推し進めた州のモデルを提案しようと考えました。「領土」「市民」「政府」の役割や相互作用、その他の州との関係などを矛盾なく詳細に設計し、そこで発生するであろう文化的な表れを作品として制作し発表しました。

この作品についてのディスカッションでは、作品世界の現実からの乖離の度合いや、説得力のある州の詳細なモデル、および制作したオブジェクトのデザインが高く評価され、成功したプロジェクトのひとつになったと感じることができました。先述したプロジェクトでの問題点を改善しながら制作することができたと感じています。

このように、思考実験のようなデザインの提示によって、見る人の思考や議論を刺激するという手法がクリティカルデザインですが、いくつかの成功や失敗のプロジェクトを経てこの手法を使いこなせるようになってきたように感じています。「現実世界と作品世界の思想的な距離」「フィクションの説得力」「見る人に思考の余地を残すための作品提示方法」など、複雑で捉えづらい現代や未来の社会についてのアイデアを伝える際に踏まえるべきポイントを体で覚えていく過程は、非常に興味深く、やりがいのあるものです。